

子育て支援情報

あしがり郷瀬戸屋敷

瀬戸屋敷には、主屋、土蔵、庭があります。靴を脱いで畳の部屋でくつろいだり、庭にある水車を見たり、お子さんと一緒にのんびりできます。時期により、無料で楽しめるお話し会などのイベントもありますので、ぜひお出かけください。

開園時間 10:00~17:00

休園日 月曜日（月曜が祭日の場合、翌日）、年末年始

場所 金井島1336 ※駐車スペース有り（無料）
その他 入園料及び駐車料は無料（あじさい祭及びひなまつり期間を除く）

瀬戸屋敷
☎84-0050



瀬戸屋敷主屋

生き生きレポート

みのりに感謝

酒田保育園 ☎82-2277

年長児が、田植えから稲刈り・脱穀まで米作りに挑戦して、収穫したお米は16.5kg。自分たちで炊飯して食べたご飯は、一粒も残さず「おいしい〜」

そして、千本余りの苗から採れたさつま芋掘りや、みんなで調理した「芋煮会」は、笑顔いっぱいでした。



芋掘りの様子

図書室だより（12月）



町民センター3階

※貸し出し冊数は4冊まで、期限は2週間です

今月のこの1冊

クララ先生、さようなら

ラヘル・ファン・コーイ 著

病気でお休みしていたクララ先生が、久しぶりに学校にもどってきた。先生の声は前とかわらず明るいのに車いすに乗っている。先生の病気はもう治らず、教室でみんなと最後の時間を過ごしたいと話す。子どもたちはショックを受ける。けれど、大好きな先生に何かできないかと考え、最後のプレゼントをすることになった。

悲しい思いをさせたくなくて反対する親もいるけれど、子どもたちは一生懸命に先生の「死」と向き合っていく。



みんな集まれ！おはなし会

◇子どもの広場『クリスマス会』

内容 「ルーブツリー」づくりと「クリスマスのおはなし会」

日時 12月13日(土) 10:00~

持ち物 はさみ

対象 5歳（保護者同伴）～

場所 町民センター2階 中会議室 A

申し込みは直接図書室へ 又は、☎82-5221

◇おはなし会（第2土曜日、第3水曜日）

日時 12月13日(土)

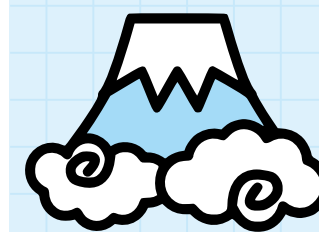
こどもの広場でおはなし会をします

12月17日(水) 15:00~

場所 町民センター3階図書室

申し込みはいりません

●家庭・地域・学校などでの読書活動を推進するため、開成町では毎月1日を「開成ファミリー読書デー」にし、読書活動を推進します。



開成町と富士山

（その9）

富士山が世界文化遺産に登録されたことに合わせて、「開成町と富士山」シリーズを連載しています。おたのしみください。

教育総務課 ☎82-5221

古来、富士山は女人禁制の山でした。不浄の存在とされた女性性は、六〇年に一度の庚申の年に八合目まで、それ以外の年は吉田口登山道二合目付近の「女人天拝所」までしか行くことが許されませんでした。宝永四（一七〇七）年の大噴火で、開成町周辺も大きな降灰被害を受け、復興には約四〇年も要しました。ですが、それ以上の被害を受けた山麓の須走村は、翌年の夏には復興を成し遂げたといわれています。それは、以前にも増し登山者が増えたことなど富士講の流行が一因と考えられています。天保三（一八三二）年、登頂の限界といわれる十月末頃に、ちよんまげ姿の男装で登頂したという、初の女性登山者の記録があります。「高山たつ」当時二十五歳、元尾張徳川家奥女中。彼女が富士講の師と仰ぐ小谷三志という行者や、男性信者六名



八合目付近から山中湖方面を望む H26.8.13撮影

参考文献
板倉登喜子ほか（一九九二）『日本女性登山』大月書店

も一緒に登頂しました。小谷は女性の積極的な生き方や解放を呼びかけるために、禁止されていた、女性による富士登山を敢えて実行しました。明治四（一八七二）年に女人禁制が解かれると、富士登山する女性のニュースが新聞でも大きく報道されました。女性解放運動の先駆者、平塚らいてうはこのニュースにとっても熱中したと著書に記しています。誰もが自由に登山できる現在、年間約三十万人が八合目以上に訪れています。内、およそ三割が女性登山者と推測されています。（文化財保護委員会 島村礼子）

*文芸

俳句	十一月吟	短歌	十月詠
開成俳句会 破れ垣の裾や色付く万年青の実 老夫婦薪重ねをり冬隣 万年青の実人の出入りを見る如し 誉められて黒枝豆を配りたる 子等の声聞こえぬ村や万年青の実 家壊す重機の音や秋晴れて とりどりの傘千す庭や万年青の実 枇杷咲くや垣間見えたる余生なる 形よくすまし顔なる万年青の実 稲架掛の色濃くありぬ日暮富士	類あたる風の尖りて冬近し 冬近しとは冬隣と同じ解釈を季語ではしている。立冬を近くしてすぐ冬が迫り来ることを表している。 掲句の眼目は〈中七〉の〈風の尖りて〉である。冬の近くなった事を類に触れた〈風〉に感じ入った作者の繊細な句心である。 新井たか志 選評	連日の猛暑も終はりいつしかに 蟋蟀の初音聞きたる夕べ 今年も猛暑が続く、閉口する日が多かった。それが終わり、早くも蟋蟀の初鳴きを夕方に聞いた作者は、秋の訪れが遠くないと強く実感した。本格的な秋を待ち焦がれる心情が反映されている歌。 近藤 正臣 選	眼科医の待合室では眼閉じ 軽音楽を黙し聴き入りつ 最近の眼科手術は、診療内容にもよるが、短期間で終ると聞く。待合室で、作者が、眼を休め、軽音楽をひたすら聴き、心を落ち着かせている様子が伝わってくる。眼と耳の対比の構図も面白い。 府川ハツエ